

が大量に死んだ。藻類やプランクトンが異常に発生して窒息死したのである。瀬戸内海でハマチが数百万匹もが潮で死んだことが新聞に報導されているが、それと同じことが起ったわけである。

同じ夏の八月三十日に阿見の湖岸の人達が経験した悪臭は湖の藻類やプランクトンが腐った臭いだといわれている。十月には霞ヶ浦でとれる魚のほとんどの種類に皮膚病が発生し、オデキ魚や出血魚がたくさんとれて問題になった。これらの事件はいずれも霞ヶ浦が汚染され水質が極端に悪化したことに帰因する。では、去年霞ヶ浦の水は何故こりまで汚れたのか。その理由の第一はいうまでもなく浄化しきれない汚水が流入したことにある。その他の理由としては水位が低下し濁水したこと及び常陸川の水門を締切ったことなどもあげられている。

汚水に入ってくる汚染物質は大きく分けて毒物、重金属等の汚染と有機物による汚染の二つに大別することが出来る。水銀、カドミウム、DDT、PCB、シアンなどの汚染は前者に属する。これらの物質は多量に流入すれば急性中毒を起すことは勿論であるが、極希薄の濃度

で河川水中に存在しても、食物連鎖を経て次第に体内に蓄積され慢性中毒となる。場合によっては生命すらも奪う結果となることは、水俣病、イタイイタイ病、カネミオイル病などの示すとおりである。幸いにも霞ヶ浦ではまだこの種の汚染については余り知られていないが、工業団地が続々と誘致され、金属、化学、機械工業などが盛んになってきているので、この点について安心というわけではない。むしろ監視を強めることが重要である。

現在、霞ヶ浦で問題になっているのは、むしろ後者の有機物による汚染である。有機物というのは、生物が関与してつくりだされる物質の総称と定義される程であるから、それ自身は本来毒物ではない。それどころか、ある程度の量は湖沼や河川の生物の繁殖を促進する栄養分となつて魚介、藻類など人間の生活に必要なものの生産量をあげるのに役立つのである。

「水清ければ魚住まず」の古言の示すとおりである。

天然の水には窒素とリン酸が少ないので山深い水源地の溪流では川石には水アカも生えない。このような所では昆虫を常食する岩魚しかいない。やや下流にいくと窒素や